

身代わりの生贄
凶大王子の愛に困惑中
だったはずの私、

1



パールちゃん

ナディアが幼い頃から
そばにいる不思議な存在。
薬草を使った化粧品づくりを
手伝ってくれる。

クロヴィス

エルランジェ王国第二王子。
傲慢で横暴な態度から
“凶犬王子”の異名を持つ。

ナディア

マスカール伯爵家長女。
前妻の娘という立場から、
家族から虐げられる日々を
送っている。

Character



マスカール伯爵

マスカール伯爵家当主。
実の娘であるナディアの
存在を無視している。

オルガ

マスカール伯爵夫人で
ナディアの義母。
ことあるごとにナディアに
嫌がらせをしてくる。

アスラン卿

クロヴィスに仕える
忠実な騎士。穏やかで
人当たりの良い性格。

ジゼル

マスカール伯爵家次女で
ナディアの異母妹。
オルガと共にナディアを
見下した態度をとる。

身代わりの生贄^{だったはずの}私、
凶犬王子の
愛に困惑中 1

第一章	伯爵家のシンデレラ	006
第二章	緑の館と凶犬王子	028
第三章	緑の館の秘密	057
第四章	凶犬王子の存在理由	076
第五章	シンデレラの居場所	087
第六章	妖精の森	124
第七章	葛藤と本音	143
第八章	凶犬王子の企み	159
第九章	甘すぎるデートに、本心を暴かれて	167
第十章	夜会準備	210
第十一章	凶犬王子の牙	227
第十二章	シンデレラの望み	245
第十三章	平和なひととき	276
番外編	パールちゃんの気持ち	288

ここはエルランジェ王国でも歴史が長く、名家と言われているマスカール伯爵家の屋敷。伯爵家の歴史の分だけ屋敷も古く、何度も修繕を繰り返しているけれど、荘厳さは損なわれず美しさを保っている。

それだけに窓の数は多く、一日あっても到底ひとりで拭き終わりそうもない。そう弱音を吐きたくても、私はひとりで拭かなければならない。

拭き終わった窓には青に少し闇を落としたような露草色の髪を簡単にまとめ、スマイレ色の瞳に諦めの色を浮かべる女が映っていた。

窓に映るのはナディア・マスカール。由緒正しい伯爵家の十七歳の長女——私だ。

「まだ、ここの掃除も終わってないの？ これではお客様が来たときに恥をかいってしまうのはわたくしなのよ。あの女の娘はやっぱリグズね」

「お母様、お義姉様をあまり責めないで。元から要領が悪いのだから仕方ないのよ」

濡れた雑巾を手にしている私の目の前で、煌びやかに着飾った伯爵家の現在の女主人オルガ様が窓枠を指先で撫でた。まだそこは拭いていない場所だとわかっていて、指に埃を付けて鼻で笑う。言葉よりも蔑む視線の方が鋭く、真つ赤な口紅を引いた唇は歪な弧を描いている。

その隣には彼女と同じ甘い蜂蜜色の髪をした少女が、私と同じスマイレ色の瞳で母親と同様の視線

を送ってきた。誰もが可憐だと賞賛する彼女の顔は、優越感に浸った表情を浮かべている。

悲しくも、彼女たちは私の現在の義母と異母妹にあたる人たちだ。

「まあ、ジゼルは優しいのね。ナディアにも気を配るなんて、自慢の娘よ」

「当然ですわ。お母様も根気強くお掃除について教えるなんてお優しいわ」

「ふふふ、本当に良い娘ね。それに比べて……ナディアは旦那様の血も引いているのに、何ひとつ良いところを受け継がず、あの女にばかり似て嫌だわ。華やかさのかけらもない姿に、要領も悪くて、性格も暗い。旦那様が可哀想」

お義母様はわざとらしく大きなため息をついた。お父様を敬うことで、私を貶める。

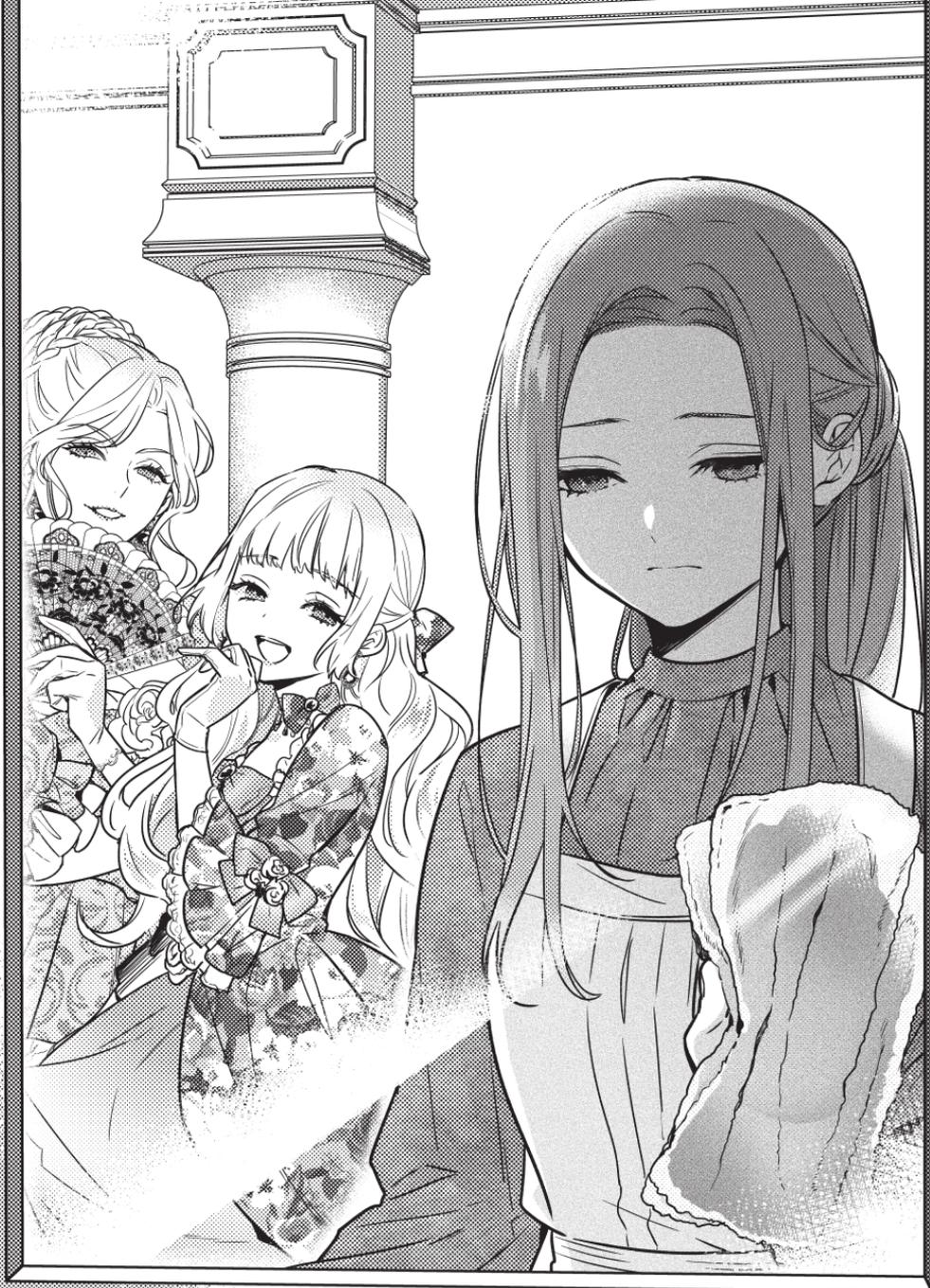
「申し訳ございません」

意味のない謝罪の言葉を口にするのが精一杯。反抗的な態度を示せばどうなるのか、恐ろしさを知っている私は耐えることしかできない。強く握った拳を雑巾で隠しながら、お義母様の口から吐き出される毒が尽きるのをじっと待つだけ。

「本当に哀れよね。あの女に瓜二つで生まれたために、どれだけ頑張ってもあなたは旦那様に振り向いてもらえることはないんだもの。まあ、これだけ出来が悪ければ、似ていなくても目をかけてもらうなんて無理でしょうけど……うふふふ」

まるで少女のように、無邪気な声を出してお義母様は笑った。勝者は自分だと見せつけるように、高らかに。

私はお義母様とは逆に、静かに視線を床に落とした。このときも表情は変えないように気を付け



る。あからさまに悔しげな表情を浮かべたら、調子づかせてこの時間が長くなってしまおうから。

「さいわいにも、今日は終わりのようだ。」

「お母様、明日の夜会のドレスを一緒に選んでほしいと思っていたの。今からドレスルームに来てくださる？」

「ジゼルがお義母様に腕を絡ませ、いつものように甘え始めた。」

「良いわよ。この娘と話をしている場合ではなかったわね。ジゼルは容姿も性格もとても愛らしいのだから、きちんと選ばなくてはね。そういうことだから、ナディアはきちんと綺麗きれいに掃除しておくのよ！」

ふたりは私の服装を一瞥し、鼻で笑ったあと衣裳部屋へと入っていった。

ジゼルのドレスのために用意された広い一室には、数えきれないほどのドレスやワンピースが収納されている。月に何着もオーダーし、今も着々と増えている。もう一室、彼女のための衣裳部屋を作る話も出ているほどだ。

「飽きないわね……」

優しい人間ならば、義理の家族を用人のように扱ったりしない。毎日繰り返される茶番ももう飽き飽きだ。

もう一度窓に視線を戻し、鼻で笑われた姿を確認した。

服装は平民と変わらぬ質素なワンピースに白いエプロンの組み合わせ。はつきり言うのと、用人の制服よりもみすばらしい。

裕福なこの家のメイドの制服は、有名なデザイナーが手掛けたもの。エプロンは上質な生地フリルが付いていて可愛いと評判。私にも支給してほしいくらいだ。

それに実母と瓜二つの私の顔には、一切化粧を施してはいない。道具は持つてはいるけれど、化粧をすれば「色気づいて、誰を誘惑する気なのかしら」とお義母様たちに絡まれる頻度が増えるだけ。

蝶よ花よと育てられる一般的な令嬢とは、程遠い自分の姿に苦笑した。

どうして私がこのような状況に置かれているかということ、全ては父の不貞が招いたこと。

私の実母は、父であるマスカール伯爵を心から愛していた。娘の私から見ても、お父様の容姿は年を重ねても若々しくて整っている。柔らかみのある落ち着いた茶色の髪に、髪色とは対照的に明るいスマイレ色の瞳。甘みの強いマスクで、若い頃は数多くの浮名を流したそう。

生家に反対されながらもお母様はお父様に一途に思いを寄せ、親から勘当を言い渡されても諦めることはなかった。その情熱がお父様の心を動かし、ふたりは大恋愛の末、結婚したはずだった。

けれどお父様の気持ちは、お母様だけに長く向けられることはなかった。

お母様が私を身ごもって半年後、不倫相手の妊娠も発覚。一夫多妻はもちろん、この国では愛人を持つことも歓迎されない。お母様は「不倫相手との関係を断ち切るのなら、許してあげる」と告げた。

しかし、あろうことかお父様はお母様に謝罪し許しを請うことをせず、逃げるように不倫相手の

いる別宅に入り浸るようになった。

「早く若さと美しさを取り戻さないと。取り戻せば旦那様の心もきつと、あの頃と同じように、わたくしだけを見てくれるに違いないわ」

お父様に心酔し、一途に愛していたお母様は、私を産んだ直後からあの手でお父様の心を取り戻そうと努力を重ねた。

しかし、子どもを産んだとは思えないほどの若々しい美貌を維持し、使用人たちから陰で魔女と呼ばれても一番の願いは叶えられなかった。当然のように、彼女の心は病んでしまった。

そうして自分の力だけではお父様を振り向かせられないと考えたお母様は、私にも努力を強いた。物心ついた頃には、すでに家庭教師が隣にいた。言葉遣い、食事のマナー、お辞儀の何かひとつでも至らない点があれば叱責される。体罰はなかったものの、厳しい教育を施すようになった。

不倫相手にこれ以上負けられないという、対抗心からの教育。私が優れていれば、お父様の関心をこちらに向けることができるだろうと信じていたに違いない。

懸命に努力し先生から及第点をいただいても、お母様は私を褒めることはなかった。ひとつでできるようになれば「次はこれ」「もつと上を！」と際限なく完璧を求める。褒めるときがくるとしたら、それは彼女の願いが叶ったときのみだ。

そうしたら私のことも愛してくれるかしら——と淡い希望を糧に、私はレッスンに励んだ。けれども、その願いは未来永劫叶わないものとなった。

心だけでなく徐々に体も弱ったお母様は風邪を召して、天に昇っていった。

死にかければ、さすがのお父様も様子を見に来るだろうと考えたお母様が、危篤直前まで薬を拒否したせいもあるかもしれない。

それでもお父様は姿を現さなかった。

私が十二歳のときの、春が訪れる直前のことだった。

『唯一の心残り……この死に際になっても、旦那様があの女のそばにいることよ……何が違ったの？　こんなにも愛しているのに……どうして……』

最後の言葉は看病していた娘の私に向けたものではなく、愛を取り戻せなかった無念の言葉だった。

愛に溺れ、墮ちる。執着とはこういうことなのかと、幼心に衝撃を受けた記憶は今も色褪せない。

恋は素晴らしいものだと、教本に載っている詩には書かれていた。愛は人を強くするものだと、音楽の先生からはオペラの解説で教えてもらった。

本当に？

私の目の前で儂くなった女性は、恋に傷付けられ、愛のせいで死んでいったというのに。恋とは人を愚かにするもので、愛とは恐ろしいものではないの？

恋と愛に対して、私は一切の希望を持たなくなっていた。

そしてお母様が亡くなって半年後、お父様の不倫相手の女とその娘——義母オルガと異母妹ジゼルがマスカル伯爵家に越してきた。

それから生活は一変した。

後妻であるお義母様にとつてお母様は憎き恋敵^{こいがたき}。真実の愛を邪魔する障害とでも映っていたの
でしょう。母の現身^{うつしみ}のような私を目の敵^{かたき}にした。そんなお義母様が育てた娘も同じ思考になるの
は当然で、ジゼルも私を敵視していた。

どう見ても、お父様の愛情を惜しみなく受け取っていたのは彼女たち。私たち母娘は完全に負け
ていた。敵視する意味がわからない——そんな考えが顔に出ていたのだろう。

怒りを煽^{あお}り、今のような状況になるまで時間はかからなかった。

私が使用人のように扱われても、家庭教師を奪われても、食事に薬が混ぜ込まれて苦しんでい
ても、お父様は見ても見ぬふりを決め込んだ。彼がお義母様たちを諫^{いさ}めなかつたことで拍車がかかり、
嫌がらせはエスカレートしていくばかり。

父親としてはすでに期待していなかった。けれども当主として正妻の娘を保護するくらいは——
という人としての期待はあつたけれど、それも簡単に消えた。

ここに私の家族はいない。仲間に入りたくないなんて思っていないから、放っておいてくれれば良い
のにといつも思う。

「ジゼルには薄い桃色のドレスが良いと思うわ」

「そうかしら。でも、この前お父様にいただいたピンクダイヤと色が被^{かぶ}つてしまうわ」

「それならモスグリーンのドレスにしたらどう？ 前に注文していたのが出来ていたでしょう？」

「そうでしたわね、ふふ」

窓拭きを進めていると、衣裳部屋の扉の奥から明るく弾んだ声が聞こえる。

私とは無縁の世界だ。

貴族の子息子女であれば十五歳で行うはずの神殿での洗礼式と、社交界の仲間入りをするため夜会に参加すること——デビュタントもなく二年が過ぎ、社交界とは一切関係のない環境に置かれている。

洗礼式は貴族、平民関係なく参加するよう国より命じられた、全国民の義務。神殿に足を運び、生を受けた感謝を神に捧げることで、司祭より祝福を受けられる儀式だ。

その際、令嬢であればこの国の神の使徒——妖精を彷彿とさせるデザインのドレスやワンピースに身を包み、頭の頂には花冠やティアラを載せるなど、着飾って参加する。デビュタントを兼ねているため、用意されるドレスは普段の夜会よりも華やかで、令嬢なら誰もが憧れる一大行事。

ジゼルは薄紅色の可愛らしいドレスを着て、神殿へと行った。

一方で私はその姿を屋敷で見送り、着飾ることもせず、空き部屋でお父様が呼び寄せた司祭より簡単な言葉をもたらって終わりだった。

私が表に出ることを嫌うお義母様とジゼルのご機嫌を取りつつ、義務は果たそうと考えたお父様の苦肉の策だったのだろう。

正妻の娘が表舞台に現れなければ、もちろん噂になる。そこでお父様たちは『ナディアは母親が亡くなってからずっと塞ぎ込み、部屋に引きこもっている』と周囲には話しているようだ。

可哀想な私のためにお義母様は無理やり連れ出さず見守り、異母妹が代わりに人脈作りに勤しむ

なんていう美談まで作り上げる徹底ぶりだ。

その割には屋敷でこれみよがしに華やかな茶会を開く。私は軟禁された部屋から、庭で行われている光景を見ているだけ。

「……最低限でも衣食住があるだけマシと思いましょう」

自分にそう言い聞かせ、私は次の窓を拭き始めたのだった。



明くる日も嫌がらせは続いていた。

お義母様に呼ばれて入室すれば、頼まれてもいないのに「お茶の用意が遅いわ」と挨拶代わりに文句を言われる。屋敷には多くの使用人がいるから、その者に頼めば何不自由なく快適で優雅な生活が送れるというのに。

彼女は文句を言わないと死んでしまう病気なのかもしれない。

「どうぞお待たせしました」

「こんなに熱いものを飲ませる気？」

「——っ!？」

ティーカップが傾けられ、パシヤリと湯気の立つ紅茶が私の手にかかった。

指定された紅茶は渋みを抑え香りを楽しむために、熱湯を用いて短時間で淹れるのが望ましい銘

柄。お湯の温度が高いままなのは当然。自ら指定しておいて、この仕打ちだから質が悪い。

熱さのあまり顔を歪めれば、お義母様は一際嬉しそうな笑みを浮かべた。

「お母様、やりすぎですわ。さすがに痕が残ったら……」

隣に座るジゼルの慌てる声に、お義母様の顔色はサツと悪くなる。

過去に一度、私は激高したお義母様から酷い折檻を受けたことがある。私の手からモップを奪い、柄で何度も殴りつけてきたのだ。何度謝罪の言葉を訴えても止まることなく、私が意識を失うまで続いた。匿名の告発で、王宮の騎士が事情を聞きにくるほどだった。

けれども口の中が切れ、腫れ、私が何も話せないのを良いことに、お父様が「侵入した不審者に襲われた」と誤魔化して隠し通した。

匿名の告発——しかも目撃証言だけでは証拠として弱く、真実が明かされることはなかった。これを機に私に近しい使用人は入れ替えられ、屋敷を去った。

お義母様に何かあれば、娘のジゼルは巻き込まれる立場。普段は嫌がらせの現場を眺めているだけだけれど、度を越しそうになれば感情の起伏が激しいお義母様を諫めるようになった。

同じ轍を踏まないように相手をコントロールするあたり、お義母様よりジゼルの方が恐ろしい。「そ、そうね。ナディア、さっさと冷やしにいきなさい。今日はもう来なくていいわ」

「はい。失礼いたします」

頭を下げて退室したら、真つすぐ敷地内にある離れの小さな一軒家に駆け込んだ。

棚から小さな瓶を取り出し、中に入っている軟膏を火傷したところにたっぷり塗って塗り込んだ。

「よかった……水ぶくれができる前で」

手の甲がピリピリと痛んでいたけれど、赤みと共に痛みも引いていく。

「さすが、お母様の執念のレシピだけあるわね」

この一軒家は生前、お母様が美しさを取り戻すために、オリジナルの化粧品を研究していた場所だ。この小さな研究棟の隣には、化粧品の原料となる葉草を栽培する立派な温室もある。

ここは静かで好きだ。悪意のある言葉も視線もない。お母様の思い出が色濃く残る場所にもかかわらず、お義母様とジゼルが手出ししない唯一の場所なのだ。

「本当に現金な人たちよね。パールちゃんもそう思うでしょ？」

私はフワフワと浮きながら近づいてくる光の球体に話しかける。すると光は点滅しながら、火傷していた手の上で止まった。

「心配してくれるの？　ありがとう」

幼い頃から私は、普通の人には見えない存在が見える。パールちゃんと呼んでいる光の存在がその代表だ。

お母様からは「旦那様に気味悪がられ、避けられたらいけない」と言われ、口止めされてから誰にも明かしたことの無い秘密。

気味が悪いと言われようと、私にとってパールちゃんはずっとそばにいてくれる大切な友達だ。

「軟膏と美容クリームが減ってきたわ。蜜蝋みつろうとパーム油が残っているから、今のうちに在庫を作った方が良さそうね。パールちゃん、お手伝いお願いできる？」

パールちゃんは同意するように光を点滅させ、私の頭のあたりを周回した。言葉は直接交わせないものの、意思疎通はできる。

「クリームの在庫が切れたら、お義母様とジゼルがうるさいのよね」

特製の美容クリームはシミが出やすい年頃のお義母様や、肌の弱いジゼルの機嫌をとるための貴重な武器。他にも日常使いの化粧水や乳液も私が作っている。

温室へ行き、葉草を選んでいく。芽吹いたばかりの柔らかい葉、成熟し薬用成分を多く含む葉、葉草によって効能が変わってくるので慎重に見極めて採集する。中には花を利用する品種もあるが、開花期間が短いものは今のうちにまとめて採集して吊るし、乾燥させるのも忘れない。

業者に頼んでもなかなか手に入らない希少な葉草も多く、無駄にはできない。切らしてしまつたら、私は武器を作れなくなってしまうから。

「これだけあれば、今月末までなんとかなるかしら？」

大きめのバスケットに盛った葉草を見て、仕上がりの量を見積もる。

「蜜蝋とパーム油を使い切つてしまえば、どうにか足りそうね」

研究棟に戻ると、先ほど火にかけておいた大釜のお湯がちょうど沸いたところだった。

葉草を品種ごとに紐で束ねてから、大釜にセットした蒸し器に入れる。数分蒸らして柔らかくなった頃に取り出して、薬研でしっかりと葉草を磨り潰す。潰したものはさらし布で包み、重石をのせてエキスを抽出。一般的には葉草由来の精油を使うらしいのだけれど、お母様のレシピはエキスを使用する。

あとは温度を測りながら蜜蝋やパーム油、香りづけのオイルなどを加え、白くなるまで根気強くかき混ぜていった。

「パールちゃん、いいかしら？」

光の球体からきらきらとした光る粉が落ちてくる。光の粉を加えたそれらをもう一度しっかりと混ぜ合わせれば、特別な美容クリームが出来上がり。

私を作る化粧品がよく効くのは、パールちゃんがくれる光の粉のお陰。私がお母様のレシピを引き継いで作るようになってから、パールちゃんはずっと手伝ってくれている。

元から化粧品としての質が高かったものに光の粉が加わったことで、肌荒れも魔法をかけられたような速さで治るクリームになった。薬草の品種を替えることで怪我を治す軟膏にもなるし、パーム油をグリセリンに替えれば化粧水にもなる。

何度かお義母様たちが薬師を呼んで、私から盗んだレシピをもとに再現しようとしたが、同じ効果のものではできなかった。

私とパールちゃん、そして温室と研究棟なくてはできない代物で、それを手に入れたがためにお義母様とジゼルはここには手出ししないのだ。

ガラスの瓶に入れて、棚に並べればクリーム作りは終わりだ。

「本当に、私はいつまでこんなことしなきゃいけないのかしら」

綺麗に並べ終えた瓶を眺め、ため息をついた。

『マスカール伯爵家の正妻の子は、ナディアだけよ。あなたがいる限り、あの泥棒猫とその娘の好

きにはさせないわ。あなたはわたくしの切り札よ。この家はわたくしたちのもの……奪わせないわ」

お母様はそう言っていたが、残念ながら私は捨て札の状態だ。

伯爵家としてはおそらく可愛がっている異母妹ジゼルに婿を取らせ、婿を後継者に指名するつもりに違いない。

けれど婿が来たあと、私はどうなるのだろう。

婿の前でも変わらず嫌がらせされるのかしら。それとも「引きこもり」という嘘を真実にするために、領地で監禁でもするつもりかしら。

社交界にも出ておらず、求婚して連れ出してくれる人はいない。庶民の暮らしも知らない私は、外では生きていける気もしない。

一度、苦境から逃げ出さたくて裏門から一步出たことがあったが、パールちゃんは私の服を引っ張り引き留めた。

どうして止めるの——と葛藤している間に未知の世界に恐れをなして、それ以上足は動かなかった。屋敷に引き返したのは言うまでもない。

「本当に情けないわよね。一生息を潜めるように生きよと、神は言っているのかしら。酷い神もいたものね」

當時を思い出し愚痴を零すと、パールちゃんが慰めるように頬にすり寄ってきた。

「いつものことなのに、どうして今日はこんなに感傷的になっちゃったんだろうね……でも、もう

大丈夫。ありがとうね」

私はひとりではない。パールちゃんが一緒にいてくれれば、それで良い。これ以上状況が悪化しないことだけを祈りながら、小さな光をそっと胸に抱きしめた。

けれど神を冒瀆した言葉を漏らしたのが悪かったのか、翌日父親であるマスカール伯爵に呼びつけられたのだった。

お父様に呼ばれるのは、簡易的な洗礼式を行ったとき以来。それだけ私はお父様からいない者として扱われている。だから呼び出すには、それなりの理由があるはずだ。

胸騒ぎを覚えながら急いで応接室に入ると、すでにお父様、お義母様、ジゼルだけでなく、伯爵家で懇意こんいにしている洋裁店の女性もいた。

彼らの後ろには、綺麗で様々なデザインドレスが並べられている。

「今日はナディアのドレスを買うことにした」

「お父様……私の、ドレスですか？」

てつきりジゼルのドレス選びの着替えを手伝えと言われるかと思っていた私は信じられず、啞然あぜんとしたまま聞き直してしまった。

「ああ、オルガとジゼル。見立ててやってくれ」

いつもブランドもわからない平民用の服ばかり与えてきたというのに、どういう風の吹き回しだろうか。しかも私を毛嫌いしているはずのお義母様とジゼルは文句を言うことなく、並べられたド

レスを吟味し始めた。

わけがわからないまま私はお義母様とジゼルの着せ替え人形と化し、時々罵られながらも十着ほどの真新しいドレスを買い与えられた。

夜会に行くような華やかで豪華なドレスではない。家庭教師が着るようなシンプルでお堅いデザインインのデイドレスばかりだ。

それでも今までの服よりはずっと上質なもののばかり。そのまま着ているように命じられたドレスを鏡越しにもう一度見る。デザインはともシンプルだけれど、生地の色味は十代らしい桃色。胸元とスカートにはネイビーのリボンがつけられており、控えめな可愛らしさがあった。

「素敵……」

お母様が亡くなってから久しく着ていないドレスを前に、嫌でも気分は舞い上がりそうになる。

はじめはお義母様とジゼルが選ぶのだから、似合わないデザインばかりになると身構えていただけに拍子抜けだ。

けれども当然、この家族が心を入れ替えたわけはなく。

「お父様、どうして急にドレスを買ってくださったのですか？」

「先日、第二王子クロヴィス殿下の側付き、つまり身の回りの世話役としてジゼルを紹介するよう陛下から相談を受けた。だが、ジゼルではなくナディアを紹介しようと思う」

「どうして私なのですか？」

側付きになれば、王子の近くで自分を最大限アピールできる立場になる。見初められれば王子妃

という、令嬢ならば誰もが憧れる地位につくことができる絶好のチャンスだ。

しかも、私たちが住んでいるこの国——エルランジェ王国の王族は見た目が麗しい一族として有名。私は見たことはないけれど、先日第一王子主催の夜会に参加したジゼルが、興奮を抑えきれない様子で第一王子の容姿を褒めていたほど。弟の第二王子も美しいに違いない。

この機会をジゼルではなく、私に与える理由がわからない。

「ジゼル、ナディアはそう言っているが……譲って良いんだな？」

「はい、お父様。だって……もし何かあったら私、とても怖くて……っ！」

ジゼルは瞳いっぱい涙を浮かべ、縋るようにお義母様に体を傾けた。

「わたくしの可愛いジゼル。これだけ可愛いんですもの、凶犬と呼ばれるクロヴィス殿下の前に差し出したらどんな目に遭うか。ああっ、恐ろしい！」

「凶犬、ですか？」

「社交界の常識を知らないから教えてあげるわ。クロヴィス殿下の顔半分には醜い火傷の痕があり、恐ろしい見た目をしているのよ。それだけではないわ。性格は傲慢で横暴で冷酷。殿下に目を付けられ、不運な目に遭った貴族は数知れないわ」

お義母様は思い出したかのように身震いし、同じように怯えるジゼルを強く抱きしめた。

王族に対して不敬極まりない発言ばかり。信じられずお父様に「本当ですか？」と視線で疑問を投げかければ、彼の表情も暗い。

「殿下は社交界にあまり姿を見せないため私も数回しか見たことはないが、まさに凶犬という名が

相応ふさわしい。常に恐ろしい目で周囲を睨にらみ、誰も近寄からせない雰囲気ふんいきを纏まとっている。一度機嫌ひとたひを損ねれば、躊躇ためらうことなく相手を攻撃する凶暴な性格。そのためか、今まで他の名家からも令嬢たちが出仕したが、みな一週間も経たたず音を上げ辞めていったそうだ」

令嬢たちに何があったのかは明かしてくれなかった。だからこそ怖い。

「陛下は元々、心優しいジゼルならクロヴィス殿下の心を溶かしてくれるのでは——と期待して声をかけてくださったのかもしれないが、噂だけで怯えるジゼルがこうでは強要できない。実際に会いたときが心配だ。幸い、辞退は許されている。しかし、臣下として何もしないわけにはいかないだろう?」

つまり私はジゼルの代わりに、生贄いけにえとして凶犬に献上されるといふことらしい。これまでお母様と私に義理や筋を通したことのなかったお父様が、国に対してはこんなにも忠義を尽くそうとする人間だとは思わなかった。

いや、私が不幸な目に遭えば大切な『彼の家族』が喜ぶからだろうか。

「私は引きこもり続けていることになってはいます。陛下には、どのような説明をするおつもりですか?」

「お前の母が亡くなって五年、立ち直ったことにすれば良い。今まで夜会や茶会に招待されても断り続けていた詫わびと、咎とがめられなかった感謝の印として自ら名乗りをあげたことにする。次の候補者が見つからずお困りのようだったから、断られることはないはずだ」

「そういうことなの。お義姉様、私の代わりにどうかお願いしますね」

「もうドレスは用意したのよ。マスカール伯爵家の恥にならぬよう行きなさい。何か問題を起こしたら、二度と門をくぐれないと思うのね」

お母様が亡くなってからまともな淑女教育を受けさせなかったのに、王族の前に突き出されて失態しない方が難しい。わざと私に問題を起こさせ、家から追い出す口実が欲しいのでしょね。

今までの嫌がらせも、自ら家出をしてほしくてやっていたのかもしれない。素直に使用人の真似事をしてきたことが虚しくなってきた。

すると光の球が目の前に下りてきた。パールちゃんだ。

もちろんお父様たちには見えていない。

パールちゃんは私の胸の中に飛び込み、何度も光を点滅させた。私にはそれがエールに見えた。

そうよね。どうせ拒否権はない。そして三人は私との縁を切りたがっている。それなら――

「お父様、マスカール伯爵家を代表する身として殿下の前で粗相しては大変です。これまでお義母様やジゼルの希望で様々な身の回りの手伝いをしていましたが、殿下の側付きの仕事に専念するため、今後は一切関わらなくても良いとお認めください。自分たちが粗相の原因にはなりたくありませんよね？」

「確かに。わかった……オルガとジゼルも良いな？」

どこか不満そうにしていたが、ふたりは頷いた。

「それから住まいを本邸から研究棟に移し、ひとりりで暮らす許可をください」

「そこまでする必要があるのか？」

「私は使用人の真似事をするために、ここにいたも同然です。仕事があれば本邸に在る必要はありませんし……何より皆様も、私がない方が家族水入らずで過ごせて良いかと思えますが？」

その方があなたも罪悪感がないでしょう？ と問うようにお父様を見つめれば、彼が静かに息を飲んだのがわかった。

私の姿を見る度に、お母様に責められるような気分を味わっていたのは前から薄々気づいていたが、凶星すばしだったらしい。

「旦那様、ナディアの希望通り研究棟に移ってもらいましょう。もうあの女の影を見なくて済むんですもの。わたくしも穏やかに過ごせるようになるわ」

「お父様、私からお願いですわ。お義姉様の姿を見なくて済めば、私のせいで殿下の元に行くことになったという罪悪感も和らぐと思えますの」

お義母様とジゼルが賛同するのは予想通りだ。

嫌がらせができないのなら、私は用済みで目障りめざわりなだけ。お父様が反対する理由はなく、私の主張は通った。

偽りの家族から離れ、なおかつ大切な温室からは離れずに済みそうだ。

本邸を出ていくのだから掃除や食事について本邸の使用人に助けを求めてはいけな、という条件は付け足されたが問題ない。代わりに側付きの給金は直接受け取れることになり、そのお金で食料など必要なものは本邸から買えることになった。

きちんと書面に残し、サインもした。

「では契約は成立ですね。早速私は研究棟に移る準備をしますので、失礼いたします」

「出仕の日程は追って連絡する。それまでに終わらせておけ」

「かしこまりました」

深く一礼してから退出した。

本邸の自室に戻り、ホッと深いため息をついた。

「最後、随分と満足そうな顔をしていたわね。パールちゃんも見たでしょ？」

お義母様とジゼルは笑みを浮かべていた。あれは側付きの仕事が長続きせず、お金も尽きて困る私の姿が見られることに期待している顔だった。

私からの要望を簡単に受け入れて期待を持たせ、失敗させて突き落とす。

「ふふ、上等よ」

第二王子殿下に見初められようとは一切思っていない。

けれども側付きとして認めてもらい、ずっと働くことができればこの家族から干渉を受けずに生きていける。側付きでいる間は殿下の庇護下にあるため、お義母様とジゼルでも私に手が出せないはずだ。

こんなチャンスを逃すわけにはいかない。

「パールちゃん、応援してね」

私がニツと笑うと、パールちゃんの光は強く輝いた。

ジゼルではなく、私が側付きとして出仕することを認める——という国王陛下の許しが出てから二週間後、ついに第二王子クロヴィス殿下のところへ行く日がやってきた。

王宮へ行く馬車にひとり揺られながら、クロヴィス殿下の情報を整理する。

主に私を怖がらせるためにお義母様とジゼルがわざとらしく話しかけてきた内容で、随分誇張されているだろうけど、まったく情報がないよりはマシだ。

クロヴィス殿下は今年で御年二十歳になる、王位継承権二位の王子。顔には火傷の痕があり、目つきも鋭く誰もが恐れる容姿。一部の親しい人を除き、他人は寄せ付けないという大の人嫌い。王族以外は人と認めない差別主義者という話もある。

またクロヴィス殿下に目を付けられた者は獵犬に狙われたように周囲を嗅ぎまわられ、些細なミスも不正として扱われて彼に嘔みつかれ、流血沙汰になることも多いらしい。その上呪いを受け、身の回りで怪奇現象が起るだけでなく、幻覚や幻聴に長く悩まされるといふ噂もあるんだとか。

そんな殿下は国王陛下に謹慎を言い渡されて、現在王宮の裏にある『妖精の森』と呼ばれるところにひとりで暮らしているらしい。

にわかには信じがたい話ばかり。話を盛りすぎて逆に怖さが半減だ。お陰で緊張が和らいだわ。王宮の門を越え、森の中に入り十分ほどすると目的地に到着した。

緑の館と呼ばれる建物は白い壁に緑の屋根の二階建てで、想像よりも小さく、屋敷というよりはマナーハウスという表現がぴったりだ。

「ナディア・マスカール嬢でいらっしゃいますね。僕はクロヴィス殿下の専属騎士をしておりますニベル・アスランと申します」

茶色い髪に琥珀色の瞳、背がとても高いけれど不思議と威圧感はない。柔らかな雰囲気、騎士が、笑顔で出迎えてくれた。

「アスラン 卿 ですね。お出迎え感謝いたします。どうか本日よりお願いいたします」

「早速、緑の館にご案内します。どうぞ、こちらに」

アスラン卿に案内されエントランスに足を踏み入れた。

エントランスは吹き抜けになっていて、調度品や装飾は一切なくガランとした空間が広がっていた。そして埃の匂いに思わず顔をしかめてしまった。

「掃除が行き届いておらず、不快な思いをさせてしまいましたね」

「申し訳ございません！ その——」

「仕方ないことです。以前はクロヴィス殿下の乳母で、側付きを務めていた僕の母が管理していたのですが、体調を崩して職を退いてからこの有様なのです。クロヴィス殿下は警戒心が強く、その後任候補者も拒絶されてしまって。僕たち騎士も普段の任務があり、どうしても後回しにしてしま……」

「左様でしたか。私は認めてもらえるよう頑張らなければなりませんね」

「期待しております。それではクロヴィス殿下がいらっしやる二階へご案内します」

エントランスにある階段を上り、静まり返っている廊下を進んだ。

人嫌いという噂は本当のようで、屋敷には私たち以外誰もいなかった。

「ここからはマスカール嬢おひとりで殿下にご挨拶ください」

「はい」

ある扉の前で立ち止まると、アスラン卿は「失礼いたします！」と言ったあと扉を開けた。

「——っ」

思わず息を飲んだ。

重厚な机があることから執務室ということはわかるのだが、応接用のテーブル、ソファ、床のあらゆるところに本や紙の束が散乱していたのだ。エントランスの埃が可愛いくらいの散らかりっぷりに慄く。

「まだ俺のところに来たいと思う令嬢が残っていたとはな」

啞然としていると、机に積み重なっている本の塔の陰から、青年が頬杖をつきながら顔を出した。

王族エルランジェ家直系の証である光を集めたような色素の薄い金色の髪、筋の通った鼻梁に薄い唇、完璧な配置で載せられたエメラルドのような瞳は、鋭く観察するようにこちらに向いていた。

そして噂通り、私から見て左半分には爛れたような火傷の痕があった。仮面や前髪で隠すことなく曝け出された痕は、普通の令嬢なら恐ろしくて目を背けてしまうような痛々しさがある。

本来の造形が美しいからこそ、痕の恐ろしさが際立っていた。

でも、私はこんなことで怯えていられない。

「クロヴィス殿下とお見受けいたします。本日は国王陛下のご紹介で参りました。私はマスカール伯爵家の長女ナデアでございます」

幼いときに習い、忘れないように密かに練習を続けていたお辞儀をする。

「お前は、どんな腹積もりでここに来たんだ？」

「殿下がより快適な生活を送れるよう、そのお手伝いをするためでございます。ご期待に添えられるよう努めますので、遠慮なくご指示ください」

「そうか、こっちに来て顔をよく見せろ」

ゆっくりと頭を上げ机の前に立つと、再び冷たい視線が容赦なく向けられた。まるで喉元のどもとに牙を当てられたようなプレッシャーを感じる。目に見えて不機嫌な様子だ。

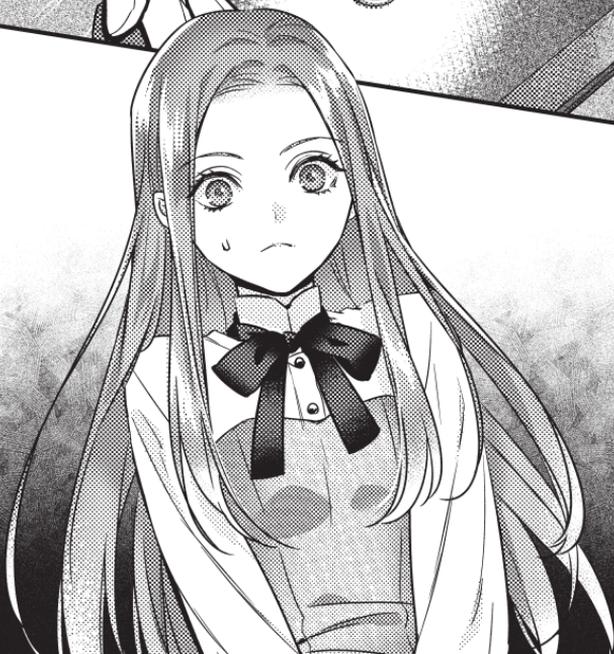
私はただ静かに受け止めるだけ。

「ここでは俺の命令が絶対だ。俺の望みを叶えられないような人間はいらない。消えろと言ったら、すぐに出ていけ」

「かしこまりました」

「ならお前の仕事は掃除だ。床も照明も何もかも、緑の館の中を全て綺麗にしておけ。次、お前から俺を訪ねていいのは、全て終わってからだ」

彼はシルバーのリングを本の上にトンと置いた。



「入館許可証のようなものだ。出入りするときは必ず身に付けておけ」

「はい。ちなみに掃除に期限や注意点はございますか？」

「自分で考えろ。さっさと出ていけ」

噂に違わぬ傲慢さで命じたあと、興味が失せたように鋭い視線は彼の手元にある本に落とされた。私は深く一礼して部屋を出た。

「どうやら一次関門は突破できたようですね」

「アスラン卿、やはり私はすでに試されていたのですね」

掃除を命じられたとき、もし怒りを顔に出していたら即刻解雇を言い渡されたに違いない。

主あそびの身なりや身の回りを整える側付きとは違い、掃除は身分の低いメイドの仕事。しかも床掃除は、メイドの中でも階級が下の者や新人がするような仕事だ。

側付きとして出仕した貴族令嬢にとっては屈辱的な行為で、抗議されてもおかしくない命令だ。ありがたいことに私にとっては慣れた仕事。思わず笑みが零れてしまう。

「おや、殿下の命に不服はないのですか？」

「ええ、覚悟してきたので平気です。早速ですが、掃除道具が置いてある物置に案内してくださいませんか？」

緑の館は、マスカール伯爵家の屋敷ほど大きくはないけれど、それなりに広さはある。終わるまで何日かかるか正直不安もあるけれど、全力を尽くすしかない。

私がニッコリと笑みを向ければ、アスラン卿は一瞬だけ目を見開いたあと「もちろんです」と嬉うれ

しそくに腰を折った。

クロヴィス殿下と初めて挨拶をした翌朝、私はいつも通りの時間に起きた。

はじめにパールちゃんと一緒に温室に行き、薬草の手入れをするのが日課だ。目立つ雑草を抜き、それから水やりをする。弱っている薬草の近くには肥料も撒まいておく。

手入れが終わってから、朝食を摂とる。パールちゃんには小さく千切ったパンにジャムを載せて渡してあげる。光の中へと食べ物が少しずつ消えていく様子は、いつ見ても不思議な光景だ。

最後に最低限の化粧をして、髪は掃除の邪魔にならないように束ねる。そして新品のデイドレスではなく、着慣れた質素なワンピースに袖そでを通した。もちろん、持っている中でも比較的新しく綺麗なものを選んでいる。

「今日からが勝負ね。パールちゃん、留守番を頼んだわ。行ってきます」

パールちゃんが元気いっばいに光を点滅させて応援してくれた。

晴れやかな気持ちで研究棟を出て、裏門の前で迎えの馬車を待った。

昨日はマスカール伯爵家の馬車で向かったが、今後はクロヴィス殿下の手配する馬車で行くことになっている。

「マスカール嬢お待たせしました。お迎えにあがりました」

「おはようございます。アスラン卿、本日からお願いします」

「おや、そのお姿は」

「やはり失礼でしたでしょうか？」

実用性を重視して選んだ服だったが、やはりクロヴィス殿下の側付きとして相応しくない服装だと、咎められるだろうかと不安になる。

けれどもアスラン卿は楽しそうに首を横に振った。

「実に頼もしい。さあ、参りましょう」

慣れぬエスコートを受けて、私は緑の館に向かった。

緑の館に着いたら真つすぐ物置部屋に行き、掃除道具を出していく。昨日頼んでおいた大量の雑巾や新しいモップがすでに補填ほてんされており、アスラン卿の仕事の早さに感謝した。

「さあ、やるわよ！」

腕まくりをして、エプロンをする。家から持ってきた小ぶりのカバンを肩にかけ、そこに雑巾とたききを入れ、最後は脚立きだつをしっかりと抱きかかえた。

埃っぽいところの掃除の順番は、上から下へするのが鉄則。クロヴィス殿下の気が散らないように静かに二階へ上がり、廊下から攻めることにした。アスラン卿に確認したところ、二階はどの部屋も入ってはいけないとお達しだ。

「さすが王族の住まいだわ。照明は蝋燭ろうそくではなく全てオイルランプ式だし、綺麗なガラス細工でできているわ。壊さないように気を付けないとね」

脚立にのぼって照明器具の埃をハタキで優しく落としていく。火を囲うガラス製のホヤには煤すすがついているので、丁寧ていねいにひとつずつ雑巾で拭き上げる。曇っていたガラスが透明感を取り戻すと、

火をつけなくても太陽の光を反射して輝きを放った。

あとは床に落ちた埃やごみをほうきで集めれば、二階はひと段落だ。調度品も絵画も飾られてなかったため、あっという間に終わった。

「本当は風を通して換気したいけれど、それは今度相談してからね」

勝手に窓を開けると、そこから不審者が侵入する可能性もある。クロヴィス殿下でなくても、護衛を担当するアスラン卿に許可を得てからの方が良いはずだ。

そう思いながら脚立を持って階段を下りようとしたとき、足元に風が走った。

「えっ？」

パッと振り向くが、どこの扉も開いていない。もちろん窓が開いているはずもなく。不思議に思っていると、エントランスから人の気配を感じた。

「お疲れ様です」

「アスラン卿！」

「精が出ますね。脚立は僕が持ちましょう。マスカール嬢はどうぞ昼食を」

ありがたいことに、昼食は王宮が用意してくれることになっている。

「お気遣いありがとうございます。ですが、まずはクロヴィス殿下に昼食をお届けくださいますか」

「では、そうさせていただきます」

階段で会釈して、アスラン卿とすれ違った。さっきの風は、アスラン卿がエントランスの扉を開けたせいなのかもしれない。

そのあと驚くほどの豪華なサンドイッチと付け合わせを食べ終えると、次は一階の埃落としを始めることにした。

空き部屋は後回しにして、まずは人通りがあるエントランスから手を付けることにする。二階と同様に調度品や絵画はないが、広くて窓の数も多い。

さすがにその日では終わらず、翌日も一階の埃落としから始めることになった。

二日目、三日目もひたすら脚立ののぼり下りを繰り返して、空き部屋も含めて汚れを落としていく。この間、この館を訪れたのはアスラン卿など専属騎士が数名のみ。クロヴィス殿下に関しては初日から姿を見ていない。

「掃除がはかどるわ」

誰にも監視されず、話しかけられて邪魔されたり、理不尽に絡まれたりしないのは大変良い。館が綺麗になればなるほど、気持ちも清々すがすがしくなっていく。

吹き抜けで存在感の大きいシャンデリアの掃除も、面倒に感じないから不思議だ。

「掃除ってこんなに楽しいものだったのね、ふふふ」

アスラン卿に頼んで、脚立の上から手の届く高さまでシャンデリアを下げてもらい、クリスタルを一個ずつ丁寧に磨いていった。終われば満足感が心を満たしていく。

脚立の Teppan に座ったまま真上を見れば、キラキラとした世界が広がる。静かで、眩まぶしい私だけの空間。

少しばかりの余韻よゐんに浸っていると、バサリと本が落ちる音がした。

振り向くと、階段の途中で本を落としたままこちらを見ているクロヴィス殿下がいた。

掃除中だとはいえ、主人より高い位置から挨拶するのは失礼にあたる。急いで下りようとしたのだけれど――

「動くな！」

強く叫ばれ、私は動きを止める。何か失礼をしてしまったのだろうか。冷たくなっていく指先に力を入れ脚立を握りながら、もう一度クロヴィス殿下の方を振り向いた。

すると彼は淡い金髪を靡なびかせ階段から駆け下り、脚立の下で両手を広げた。

「え？」

「は？」

目が合うと、疑問の声が重なった。気まずい空気が流れる。

「おい……どうして脚立にのぼってるんだ？」

「その、シャンデリアを掃除するためにですわ。床からは手が届かなかったものですから」

「お前、令嬢だよな？」

「一応そうですが……もしかしてご心配をおかけしてしまいましたか？」

そう聞くとクロヴィス殿下は舌打ちをして、視線を逸そらした。眉間みげんには深い皺しわが寄せられ、苦虫にがむしを噛み潰したような顔をしていた。

クロヴィス殿下には、私が急に下りようとした動きが落ちるように見えたのかもしれない。

「申し訳ございません」

「まったくだ。令嬢がスカートを穿いたまま脚立を使うなど、淑女としておかしいんじゃないか？」

そう悪態をつきながら彼は手を下げようとしなない。むしろ「ほら」と、両手を高く上げてきた。これは受け止めてくれるということだろうか？

王族であるクロヴィス殿下の手を煩わせるわけにはいかないので、断ろうかとも思ったけれど、彼の行為を無下にするのも失礼にあたりそうだ。

私が戸惑っているのについて「早くしろ！」と声を荒げたので、慌てて飛び込むように両手を重ねた。

ストンと床に足がつくとすぐに手は解放された。

「ありがとうございます」

「ふん、掃除はもう終わったのか？」

「い、いえ。明日からは濡れ雑巾やモップで、窓や床を磨けたらと思っているところです」

エントランスの床は大理石でできているため、磨けばすぐに美しさを取り戻すだろう。その姿を想像するだけで、今から楽しみな気持ちになる。

「ですが吹き抜けの二階部分の窓だけは、この脚立だけでは届きそうもないのです。もっと長い梯子を用意していただくかと、後ほどアスラン卿に相談するつもりです」

「またのぼる気なのか!？」

「ええ、そうしなければ掃除はできませんので。次はスカートではなく、きちんとズボンを用意しますわ。心配ございません。高いところは慣れて——」

「駄目だ。その窓だけは騎士にやらせろ。それとも俺の意向に背くのか？」

「そんなつもりは！ 申し訳ございません」

慌てて頭を下げる。ここで解雇されるわけにはいかないのだ。

「どうか、まだ働かせてください」

「ちっ……顔を上げる」

見上げるとまた鋭い視線を向けられる。

だから私は「まだクビにしないで！」という念を込めた視線を返した。どんなに威圧的な態度をとられても、引けないのだ。

数秒後クロヴィス殿下は左の傷痕を手で覆おほいながら、深いため息をついた。

「お前が音を上げなければ良いだけだ」

そう気怠けだるそうに言い残し、彼は本を拾って二階へと足早に去っていった。

機嫌を損ねてしまったが、クビの宣告もされずに済んでホッと胸を撫でおろす。

「クロヴィス殿下は本当に怖い人なのかしら？」

先ほど緊張感があったが、睨まれても逃げ出したくなるほどの恐怖感芽生えなかった。お義母様やジゼルジゼルの視線の方がどこか恐ろしい。

どうして——とそれぞれの視線を思い出して比べ、ハタと気が付いた。

クロヴィス殿下の視線は鋭いが『悪意』がないのだ。むしろ心配して駆け寄ってくれらるほどで。それが何だか嬉しく、また明日からも殿下のために頑張ろうという気持ち自然と湧いてきた。